

日本吃音・流暢性障害学会第11回大会  
早口言語症治療の基礎知識と成人例への適用  
2023年10月22日(日) 14:00～15:20 第1会場

# 成人吃音外来での早口言語 症(クラタリング)への対応

森 浩一

mori-koichi@umin.ac.jp

国立障害者リハビリテーションセンター顧問

# 目次

- 早口言語症とは(省略)
- 早口言語症の来院理由
- 吃音との併発経過モデル
- 外来で見られる特徴
- 検査所見
- 治療で何が問題になるか
- 教科書的対応
- 実際の対応

教科書→



バンザーレン, レイチェル「クラタリング」学苑社, 2018 (COI)

# 早口言語症（成人）の来院理由

## 1. 主訴が吃音

- 「吃音外来」の看板のせいもある  
来院者のほとんどが吃音併発
- 「吃音ではないかも」「吃音なのかどうか知りたい」

## 2. 周りの指摘/推奨/指示

- 上司に「治してこい」と言われた（吃音も同様）
- 自覚があまりない
  - ✓ 気持ちよく話しているときに症状が出やすい
  - ✓ コミュニケーション困難が話し方のせいとっていない → 他人が指摘
- 「早口言語症」が知られていない
  - ✓ Stigmaがなく、悩むことは少ないかも
  - ✓ 周囲は「吃音では？」と受診を勧める

## 3. 吃音症状が前面、経過中に併発がわかる

# 早口言語症と吃音の併発経過モデル

幼児期

学齡期

思春期

成年期

壮年期

思春期以降  
に発症

年齢と共に話  
速が下がる

早口言語症

幼児期は確定  
診断できない

【つまづく】

続発性に発吃/悪化/再発

話速低下の効果

発達性吃音

幼児期に発  
吃ない人も

改善あまりな  
い人も

思春期以降の発吃・悪化

体験学習等

【転ぶ】

# 外来で見られる特徴

こんなことがあれば、早口言語症を疑え！

- 病歴聴取時の発話 **症状を含む録音を持ってきてもらう**  
主訴が吃音なのに、全く/ほとんどどもらない  
正常範囲非流暢性もあまりなく、普通に話しているよう
- 吃音検査  
中核症状頻度が正常範囲（ただし、長いブロックが時々）
- 問診にて
  - 「初対面や面接では問題ない」
  - 「何を言っているのかわからないと言われる」 **更問い:**
  - 「よく聞き返される」 **早口になった時？**
  - 電話は「だめ」「できない」「めちゃくちゃ」だが、結構使っている
  - 仕事上で言った・言わないなどの行き違いがある
  - 「言ったことが通じてなかったとすると理解できることはある？」

これらが早口言語症のせいであることを説明→治療意欲が上がる

# 成人早口言語症チェックリスト(国リハ)

1. 早口になる。速かったり遅かったりして話す速度が一定しない、話しているうちに話すスピードが上がってしまう。話す速度を自分から遅くするのは難しい。ゆっくりと話せない。
2. 速く話していると安心感や満足感がある。速く話すと気持ちが良い。
3. 速く言わないと言いたいことを忘れてしまう・言えなくなると思うので、一気に話す。駆り立てられているような気がして速く話す(焦燥感)。
4. 初対面の人と話す時は多少緊張して、ていねいに話すのでうまく話せるが、慣れてリラックスすると(早口になったりして)発話が乱れる。
5. 単語の途中や最後の音が抜ける(飛んでしまう)。途中の音が出ないまま単語や文を言ってしまう。途中で突然言えなくなって止まってしまう。
6. 単語の途中で複数の音が重なったようになって音がつぶれて出てしまう。単語の途中の発音がはっきりしなくなる。滑舌が悪い。
7. 「何言っているのかわからない」と言われる。「もっとゆっくり言って」と言われる。
8. 同じことを続けて聞き返される。「もう一度言って」と言われる。同じことを繰り返して言っても聞き取って(わかって)もらえない。
9. 言った・聞いてない、とか、ああ言ったのに・こう言ったことにされている、など、話の行き違いが起きる。言ったのに無視される。
10. どんなことを言うか頭の中に十分浮かぶ前に話し始める。ぱっと浮かんだ単語が本当に言いたいこととずれていても言ってしまう。

(「ほとんどない」～「しょっちゅう」の5択で回答)

# 成人早口言語症チェックリスト(国リハ) 2

11. 次に言う言葉や言うことが思いつかなくて(思い浮かんだことばがどもりそうだからではなく)、つなぎ言葉(「えーと」「あの」「何だっけ」等)を使う、または、直前に言った単語や文(の一部)を繰り返す。
12. 文法的に正しくない文を言ってしまう。言ってみると語順や文法が違っていることに気が付いて、言い直す。言い間違えて言い直す。
13. できごとを起きたとおりの順序でわかりやすく説明するのが難しい。
14. 1つの話題に集中して話すことが難しい。話題が飛ぶ。話している途中に関係ない別のことを思い出してすぐ言う。
15. 話す時、どこで息つきをすればいいのかわからなくなる。変なところで息つきをする。文の終わりに間(ま)をおかずに次の文をすぐ続けて言ってしまう(どもりにくくするための工夫ではなく、ついそうなる)。話していると息切れする。話していると、息が苦しくなる。
16. 会話の相手が口をはさめないくらい、一人でずっと続けてしゃべってしまう。話す役割を代わるタイミングがつかめない。
17. ゆっくり言うと音が一つずつ分かれる(音と音の間に声が出てないすき間ができ、スタッカートみたいになる)。伸ばす音でも文字の通りに分けて言う(例:「用事」をゆっくり言うと「よーじ」でなく「よ・う・じ」)。
18. 抑揚(イントネーション)があまりつかない単調な話し方になる。不自然な抑揚になる(一定パターンの抑揚の繰り返し等)。
19. 声の大きさが、言い始めは普通だが、だんだん小さくなり、モゴモゴとしたはっきりしない言い方になる。
20. 文を書いていると、途中から文字が小さくなったり、重なったり、ばらばらになったり、乱れたりして読みにくくなる。

# 検査所見

『クラタリング』(バンザーレン, レイチェル, 2018)によると

正常範囲非流暢性と吃音中核症状頻度の比が

- 3倍以上ならクラタリング
- 1～3倍でクラタリング+吃音
- 1倍以下ならクラタリングなしの吃音

しかし、吃音検査(説明、自由会話等)の中では1倍前後かそれ以下が多い

考えられる理由

- 初診では(適度に)緊張し、発話に気をつけて話せる
- 検査だということでゆっくり、ていねいな発話を心がけている

→ クラタリングの症状も吃音中核症状もあまり出ない

※ 「問題ありません」で追い返さないように



# 吃音＋早口言語症の検査所見

→ 症状頻度だけでは診断できないことがある

- 検査時の話速が、普段の会話と同じか、遅いか確認  
普段よりゆっくりの発話なら、早口言語症疑い

→ 速度変動や斉読にも注目

- モノローグ等、得意な話題だと話速が途中から上がる
- 斉読がうまくできない(本人はうまくできたと言う)
- 何気ない発話の構音速度が速い

→ 音声ディアドコ(「パタカ」)を最高速で長く

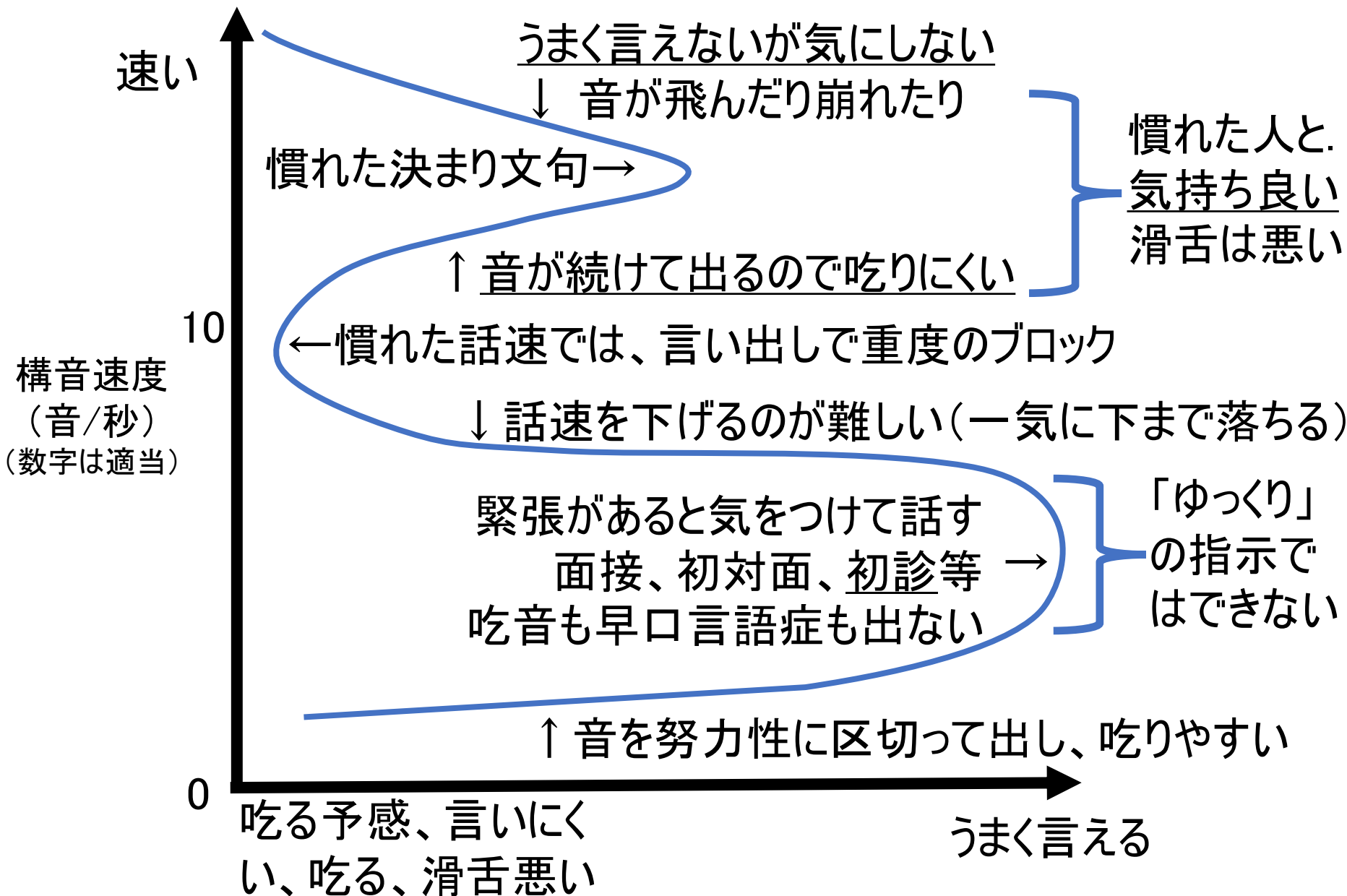
- 突然の中断、途中から構音速度上昇、不規則なリズム、  
発音不明瞭、音飛ばし等

クラタリングが併発すると、  
治療で何が問題になるか

# 早口言語症は吃音改善の阻害要因

- 早口言語症の二次症状として吃音
- 早口言語症の症状は吃音ではないという罨
- 早口による吃音の擬似改善の罨
- 外来ではともらないという罨
- 正常範囲非流暢性を吃音の「工夫」と勘違い
- 一般的な話速低下の手技の有効性が低い

# 構音速度と早口言語症の関係模式図



# 早口言語症治療の問題点

『クラタリング』(バンザーレン, レイチェル, 2018)によると、  
話速を落とせばクラタリングの問題はすべて解消する

- 話速を落とすと、併発する吃音もほぼ解消

しかし、訓練は簡単ではない

- 話速をうまく落とせないのが早口言語症、斉読もできない  
自覚的には、「ゆっくり言えない」
- 統語性クラタリング (semantic cluttering) では、語りの組  
立ても不良

# 教科書的対応(段階的集中訓練)

## 音韻性クラタリング

1. 同定
2. 音節構造の認識
3. 発話速度
4. 発話のリズム
5. ポーズ
6. 抑揚と韻律

## 統語性クラタリング

1. 同定
2. 発話速度低下
3. ポーズ
4. 言語形式化
5. 言語的複雑さのレベル
6. 情報共有/語用論
7. 語用論的困難に対応

# 教科書的対応具体例

## A. 話速低下訓練

バンザーレン, レイチェル『クラ  
タリング』学苑社、2018

### 1. 音節タッピング

- 体運動のリズムを利用、道具なしにどこでも可能
- 吃音があると随伴運動誘発の可能性

### 2. Audio-Visual Feedback (AVF): 音響ソフトを使って訓練

- 吃音症状も客観的に見ることができる
- 簡易的にはストップウォッチも

### 3. 他に、文節ごとのフレージングとポーズ挿入等

- フレージングは吃音症状を誘発しやすく、日本語向きでない印象
- 文の終わりに1秒のポーズを入れるよう指示

## B. ストーリーを作りながら話す訓練

- 段階的に、簡単→複雑

# しかし、small step訓練で改善するのか？

- 自覚的には、「ゆっくり言えない」
  - ゆっくりを意識すると吃音症状（ブロック）
- ゆっくり言うよう指示すると、極端に遅い
  - 1音ずつ切りながら言う 例：「おっはっよっう」
    - ✓ 「ゆっくり」の指示で自然な調音結合が出なくなる
    - ✓ 文字表記の通りに発音するものと思っている
  - 話速の感覚が鈍い
    - ✓ 「ゆっくり話す」時の話速（構音速度）が意識的には出せない
    - ✓ 単音間のポーズを変えて速度調節（音を引き伸ばせない）
    - ✓ かなり注意集中をしないと「ゆっくり」言えない
- 統語性クラタリングは話速低下のみで解決しない



# 国リハ成人吃音外来の独自対応:

★本人視点からの理解促進

★認知行動療法を活用

今は外来を担当していませんが…

# 話速の感覚が鈍い問題

タッピング等の訓練効果が長続き/汎化しない

「速い」「遅い」を意識しながら発話が難しい？

→ 話し方を感覚として覚える方がいいのでは？

★スピーチ・シャドーイング: 単音発話では不可能な課題

- NHKラジオニュース等の0.5倍速再生 (阿栄娜ら、2015, 2018)
- うまくできない場合、STがモデル音声、追唱できる速度を探す
- 毎日5分程度、3ヶ月間継続が最初の目標
- その後は週に1～2回の維持訓練
- 「シャドーイングの時の感じで喋る」

★初診等でゆっくりなら「その時の感じでいつも喋る」と指示

# 「早口で話すと気持ちが良い」問題

早口言語症のコミュニケーション障害を理解してもらう

内容が聞き取れない、理解されない問題の重大性を例示

- ▶『クラタリング』付録M体験談：会議で無視される等
- ▶過去の臨床症例から例示：「議事録の自分の発言が空白」
- ▶過去に類似の体験に思い当たるか聴取
- ▶同居者等が同席していれば、「何割くらい聞き取れない？」と聞いてみる

対応は？

# 「早口で話すと気持ちが良い」問題2: 対策

## 1. ★早口言語症の病態理解から行動へ

- 一種の「中毒」と説明：改善の覚悟
- 「早口で話すと気持ちが良い」をあきらめる（認知行動療法）
  - ✓ その状態になったら気がつけるように、イメージトレーニング
  - ✓ マインドフルネス瞑想訓練でメタ認知強化
  - ✓ 他の（理性的）気持ち良さに代替：「一回で通じた！」等
- 30秒以上続けて話さないスタイルを身につける

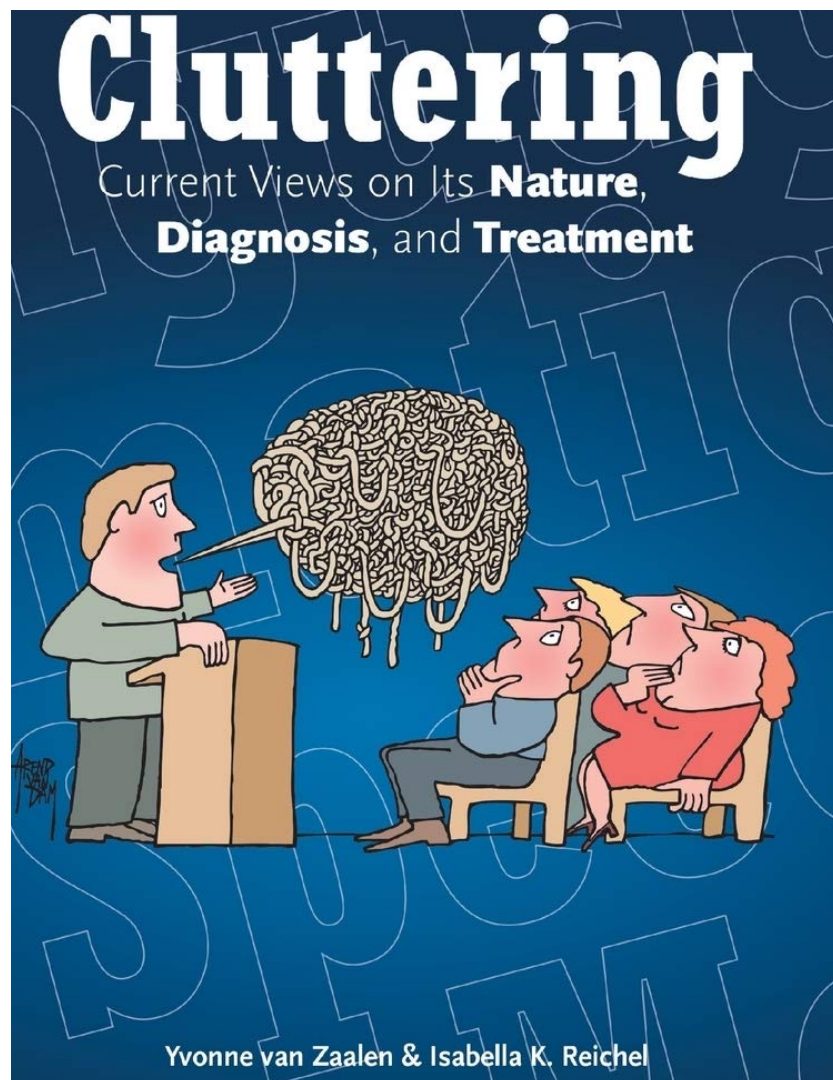
## 2. ★優先順位のつけかえ

- 発話が「気持ち良い」→「通じる」（ゆったり発話）
- 訓練しても自動的に起きないので、**決意**が必要

# 「言うことを忘れるのであせって早口で話す」問題

## ★本人視点で説明を

- ◆言いたいことを忘れないうちに全部言おうとして、早口、話の組み立て悪く、文法も不良。話題ごちゃまぜであちこち飛ぶ(ADHDと鑑別すべき)
- ◆句読点で休止しない、抑揚が異常
- ◆本人にはあせり、焦燥、強迫感
- ◆聞く方は、こんがらがったスバゲティを投げられたよう(『Cluttering』表紙絵)



van Zaalen & Reichel, 2015

# 「言うことを忘れるのであせって早口で話す」問題2:対策

課題を変えて「段階的に訓練」だけでは改善が遅い

★身につけるべき発話戦略を具体的に指導

新たな発話戦略: 解説 → 練習 → 習慣化

1. PREPの手順で話す(ビジネスの常識)

結論(Point)、理由(Reason)、例示(Example)、結論(Point)

2. 箇条書きを作る(要点・結論のみ)

3. 必ずメモ(箇条書き)を作って、それを見ながら話す(メモを読み上げるのではない)

4. 言葉ではなく、イメージや映像で箇条書き(音声とは別のワーキングメモリを使う, Arongna et al: JSLHR, 63: 688, 2020)

# 「気をつけて話せば大丈夫」問題

- 面接試験、初診時、初対面の人との会話等
  - 適度な緊張があり、発話に注意しながら話すので、ややゆっくりになり、クラタリングも吃音もほとんど出ない
  - 「気をつけて話せば大丈夫」「大した問題ではない」と考える
    - 訓練に身が入らない
    - 普段の会話に汎化しにくい
    - 滑舌悪くても自分に言い訳

対策は？

# 「気をつけて話せば大丈夫」問題2:対策

★発話に気を付けるのを忘れたときに問題が起きる

→常に、どんな場合でも「ゆったり話す」ことを決心

忘れたら反省、イメージトレーニング、マインドフルネス

→つい早口になった時に即時フィードバック

外来: 構音速度が大きい時

(気を付けるのを忘れた時)

自宅: 「プラカード法」

時間限定、怒らない約束

『クラタリング』2018に記載あり





# 併存する吃音との関係

## 治療方針

並行して対応 { 吃音： 忘れれば問題が出なくなる  
早口言語症： 忘れると問題が出る

- 早口言語症への対応が吃音にも有効
  - 音を切らずに「ゆったり話す」：内容や、内容に合わせた抑揚に注目
  - シャドーイング訓練、マインドフルネス瞑想訓練（注意の制御）
  - 発話戦略の指導（PREP、箇条書き、画像でメモ等）
- 吃音が自動的には改善しない場合
  - 楽にわざとどもる（easy bounce）、内容を理解しながら音読、認知の偏り修正、ロールプレイ、暴露療法等（北條ら、吃音研究、2021）

# 成人の早口言語症外来対応まとめ

- 早口言語症が併発すると、吃音が悪化、訓練も困難
- 見逃しやすい：適切な問診、検査、吃音に隠されてないか経過中も点検
- 構音速度を下げるのが困難、訓練が汎化・定着しにくい
- 原則として早口言語症の治療を重視（「吃音は忘れれば問題なくなる」）
- 日常訓練として、スピーチシャドーイング（0.5倍速）を毎日数分
- マインドフルネス瞑想（ヴィパサーナ）を毎日数分、メタ認知涵養
- 発話の戦略変更：箇条書き、メモ、画像で記憶
- 訓練をしても自動的にゆっくり話せるようにはなるのではないことを説明
- 外来で普通に話せている場合、その話速をどこでも使う決心を促す